実践
アクティブ・ラーニング
現代文

学校や生徒の状況に合わせて柔軟に授業の手法を見直し、対話を通じて創造性を育む

栃木県立宇都宮女子高校
黒川治彦 くろかわ・はるひこ
教職歴23年。同校に赴任して2年目。国語科。

2016年10月号に登場

栃木県立宇都宮女子高校
◎「白百合よ、貴きをめざせ」のスローガンの下、社会貢献できる人材の育成に努める。「一人一研究」の伝統を受け継いだ「自由研究」、文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校としての活動を継続した「探究活動」を実施。
◎**設立** 1875（明治8）年 ◎**形態** 全日制／普通科／女子校 ◎**生徒数** 1学年約280人
◎**2020年度入試合格実績（現浪計）** 国公立大は、東北大、筑波大、宇都宮大、東京大、一橋大、京都大などに159人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ669人が合格。
◎**URL** http://www.tochigi-edu.ed.jp/utsunomiya joshi/nc2/

前回の取材後からの授業の変化

既存の取り組みを生かし、思考の幅を広げる授業を展開

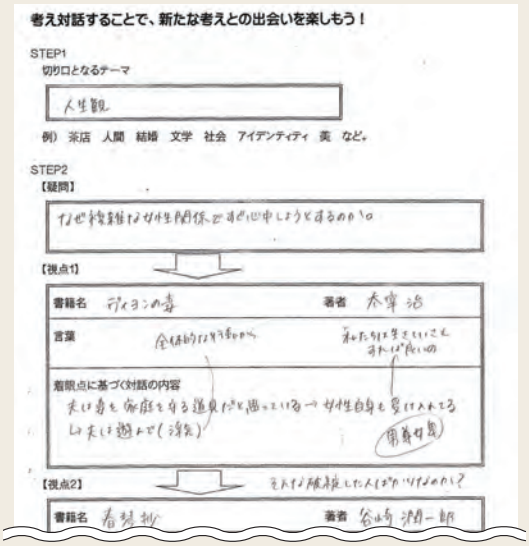
本誌2016年10月号の本コーナーに登場した黒川治彦先生は、現在、栃木県立宇都宮女子高校に勤務している。思考力など、生徒への育成を目指す資質・能力は以前から変わらないが、指導方法は目の前の生徒や学校の状況に応じて変化していると語る。

前任校の男子校で行っていた、教科書と副教材に載っている2つの評論を読み比べ、関連性を考えさせる授業は、現任校の状況に合わせて変更した。同校には、課題図書のリストがあり、生徒は各自、その中から年間15冊以上を読む。黒川先生は、その活動を生かした次のような授業を考えた。

教科書に載っている太宰治の『富嶽百景』と関連すると思う課題図書を生徒自身に選ばせ、その2つの作品にはどのような関連性があるのかを分析させる。グループでその結果を持ち寄り、特定のテーマを切り口にして話し合い、『富嶽百景』の読解を深める。最後に、話し合った内容をワークシート（図）にまとめ、グループごとに発表するといった展開だ。

「選んだ作品が異なることで、『そんなアプローチがあるんだ』『そこまで考えたんだ』といった気づきが多数生まれ、思考の幅が広がります。1人で考えることには限界がありますが、対話型の

図 授業のワークシート


考え対話することで、新たな考えとの出会いを楽しもう！

STEP1
切り口となるテーマ
人生観
例）茶店 人間 結婚 文学 社会 アイデンティティ 美 など。

STEP2
【疑問】
なぜ複雑な男性関係でまだ心中しようとするのか？

【視点1】
書籍名 ディヨンの書 著者 太宰治
言葉 全体的にはうまくいかない 私たちは生きていこうとすれば良いの
着眼点に基づく対話の内容
未だ妻を家庭を守る選択だと思っている → 女性自身も変化する
↓未だ過渡期で（浮気）
（男女関係）

【視点2】 それは離婚した人ばかりなのか？
書籍名 春琴抄 著者 谷崎潤一郎

＊学校資料をそのまま掲載。

学習では、他者の視点を知る重要性や読書の大切さを実感し、主体的な学びにつながる効果があると考えました」

課題図書の内容をメンバー全員が知っているとは限らず、前提知識が異なるため、話し合いが浅くなる可能性もあった。しかし、話し合いを通じて他者が読んだ課題図書の内容を知ることは、読書の幅が広がる機会になると、黒川先生は考えた。

「自分が選んだ課題図書の内容をほかのメンバーが知っているとは限らないという点にも配慮して、自分の考えを伝えようとする姿勢が、生徒に見られた点がよかったです」

黒川先生は、生徒の特性に応じて対話の手法も工夫している。女子校である同校に赴任した当初、クラス全員の前で1人ずつ発表する場を設けたが、発表に抵抗感を示す生徒が多く、うまくいかなかった。そこで、「ペアワーク→グループワーク→クラス全員の前で発表」と段階を踏むことで、発表への心理的なハードルが下がるようにした。

授業の変化の背景

生徒と一緒に授業をつくることを大切にし、指導の手法を柔軟に変更

初任校では、生徒同士の対話を成立させるためには、ある程度の知識を事前に生徒に与える必要があり、最初に講義形式の授業も行った。前任校と現任校の授業は、生徒が十分な基礎知識を身につけているため、1時間のうちの多くが生徒同士の対話で占められる。

「前任校と現任校では、教師が説明し過ぎると、生徒の学習意欲や考える力を削いでしまう場合があると気づきました。そこで、生徒が自分の考えを持つような予習を課し、授業では対話によって考えや疑問を出し合い、他者から学び、次の学習につながるような指導を重視しています」

現任校では、女子校ならではの特性に合わせて、1年次の最初の段階で「間違えてもよいんだ」と何度も伝え、まずは安全・安心な場づくりを心がけた。前任校よりも、ペアワークの回数を増やしたのも、そうした背景がある。

「私が大切にしているのは、生徒と一緒に授業をつくることです。目の前の生徒が変われば、授業の方法もそれに合わせて変わります」

今後の展望

国語の授業での探究を通して、新しいものを創造する力を育みたい

新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中、黒川先生はオンライン授業を実施した。古文では、話す時に強調や間の取り方を工夫し、調べ考えることを大切にした授業を心がけたところ、生徒の理解度に手応えがあった。一方、現代文では、生徒同士の対話を通じた読解を行おうとしたが、オンラインのグループワークでは生徒が発言のタイミングをつかみにくいなどの問題点が見えてきたので、実施しなかった。

「今回の事態で、状況に応じて指導の形を変えなければならないことを痛感させられました。例えば、対話には、自問自答のような自己との対話、講義での教師との対話などもあります。オンライン授業や、感染予防をしながらの授業で、いかに対話を取り入れていくかを模索していきます」

実社会では、チームで1つの物事を多角的に考えたり、自身の考えを表現したりする力が欠かせない。黒川先生は、そうした力を育めるような授業を、今後も追究していきたいと語る。

「課題図書を利用した授業は、一見関係がなさそうなものの間に関連性を見いだし、視野を広げる活動でした。新しいものは、異なるもの同士をかけ合わせることで生まれます。これからも、探究を通じて、創造性を育むような国語の授業を実践していきたいと考えています」

黒川先生の授業を受けて

宇都宮大学共同教育学部2年
登城直紀（とじょうなおのり）さん（栃木県立宇都宮高校卒業）

対話を中心とした黒川先生の授業スタイルには初めは戸惑いましたが、1か月も経つとすっかり慣れました。授業では、思考の型を学ぶとともに、自分では思いもしなかった考えをクラスメートから聞くことなどを通じて、他者との対話から自分の思考を深める手法を学びました。そうした経験があったからこそ、例えば、言葉に詰まった時に別の視点からアプローチすることもできるようになりました。大学は理系分野に進学しましたが、思考の型は文理関係なく必要なことだと感じています。将来は数学の教師を目指していますが、私も生涯、この思考の型を活用しつつ、考えを整理できる手法を生徒に伝えられる教師になりたいです。